

Event Schedule

4 April	4月1日(金)~6日(水)	日本学生支援機構奨学金予約採用候補者「進学届」提出期限(4月21日(木)初回振込希望者)[学]
	4月1日(金)~7日(木)	新入生ガイダンス[教]
	4月2日(土)・9日(土)	サークル新入部員募集(本館)[学]
	4月2日(土)・11日(月)・12日(火)・15日(金)	日本学生支援機構奨学金 新規募集説明会[学] ※4月2日(土)は新入生のみ対象
	4月6日(水)~9日(土)	学生定期健康診断(2号館)[学] ※4月9日(土)は新入生のみ(学年・学科・性別等によって日程が異なります。)
	4月9日(土)	新入生歓迎会(本館・5号館)[学]
	4月11日(月)	平成23年度授業開始[教]
		日大iクラブ入会者(新入生・再修者除く)平成23年度前期学費自動引落日[会]
	4月11日(月)~15日(金)	図書館オリエンテーリング[図]
	4月11日(月)~22日(金)	履修登録期間[教]
	4月12日(火)~20日(水)	課外講座個別説明会(行政書士、宅地建物取引主任者、簿記、ファイナンシャル・プランニング技能士、公務員、秘書技能検定)[研]
	4月26日(火)~27日(水)	日本学生支援機構奨学金 新規申請者 書類提出期限[学]
	4月28日(木)	平成23年度前期学費納入期限(新入生除く)[会]
	4月中旬~下旬	各学生研究室説明会[研]
5 May	5月19日(木)	第1回総合就職ガイダンス[就]
	5月26日(木)	インターンシップガイダンス[就] 就職マナーガイダンス[就]
	5月26日(木)~27日(金)	履修登録中止期間(平成17年度以降入学者のみ)[教]
6 June	6月2日(木)	課外講座説明会(SPI2対策講座6月コース)[研]
7 July	7月17日(日)	オープンキャンパス(夏)[入]
	7月23日(土)	前学期授業終了[教]
	7月25日(月)~29日(金)	前学期末試験/平成22年度再(含、9月卒業)試験[教]
	7月30日(土)	夏季休業開始[教]
9 September	9月5日(月)~16日(金)	夏期集中講義期間(土・日を除く)[教]
	9月23日(金)	課外講座説明会(SPI2対策講座10月コース)[研]

各項目についての不明点等は、各担当部署にお問い合わせください。また、略字は次の通り。
[教]教務課 [入]入学センター [会]会計課 [学]学生課 [図]図書館事務課 [研]研究事務課 [就]就職指導課
※日時や詳細が決まり次第、掲示板およびホームページにてお知らせします。

表紙モデル / 法学部2年 佐野志帆 撮影日 / 2011年2月

日本大学法学部

Journal

Vol.3

特集

日本大学法学部
学生満足度調査2010 ISSUE 2

満足の その先へ。

学生と教員と職員に聞きました。

10人10色の
「マイ・チャレンジ」



www.law.nihon-u.ac.jp/

詳細情報は、随時掲示板およびホームページを見て確認してください。

日本大学法学部
Journal

Vol.3

2011年4月1日発行 日本大学法学部広報 通巻111号 発行:日本大学法学部企画・広報委員会

日本大学法学部学生満足度調査2010 ISSUE 2

満足その先へ。

〈学生生活〉への満足度は約8割と高く、教員に対する信頼感もあつい。
 その一方で、学生生活で身についたこと〈達成志向〉への自己評価は低め……。
 法学部の全学生8,400人を対象に行った大規模な調査から見てきたのは
 ソコソコ満足だけでもっと達成感を感じたい! もっと実現度を高めたい! という思い。
 新しい学期の始まるフレッシュなこの季節に、
 ソコソコ満足のその先にある、夢や目標を見据えてみませんか?

※ [ISSUE 1]は「Journal Vol.2」に掲載。日本大学法学部ホームページの広報・刊行物からもダウンロードできます。

夢を
実現
させる。

ボクたちに
できる
ことは?!

大学が
変わろうと
している?!

自分の
未来を
考える。

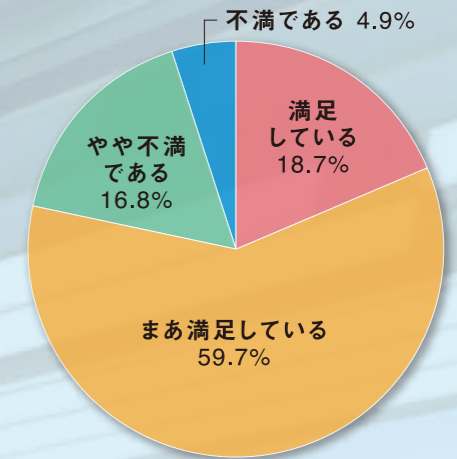
もっと
充実した
学生生活
とは…。

自由を
使いこなすのは、
自分次第。

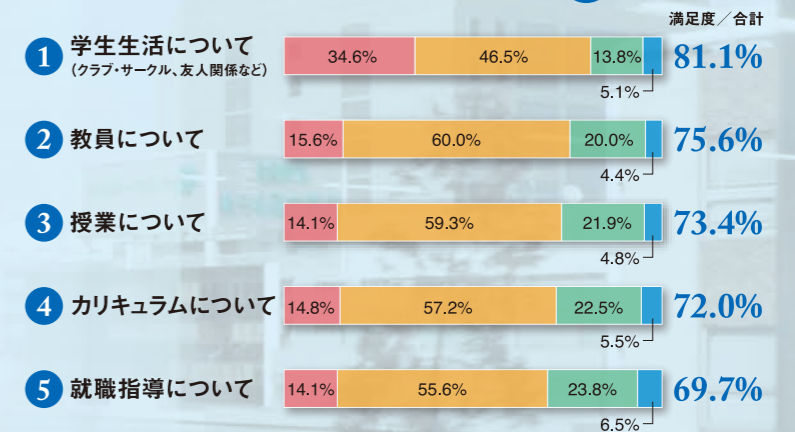
日本大学法学部 満足度調査2010から 見えてきたこと…

日本大学
法学部に対する
全体的な満足度は

78.4%
の高得点でした。



日本大学法学部のいいところベスト **5**



さらに実現度を 高めていくために。

調査から浮かびあがってきた
 「満足度は高いが、達成度は低め」
 という結果を受けて、
 リアルな学生生活に迫り
 ともに考えていきたいと思えます。

※全国50の大学でおこなった大学評価診断調査において
 「達成志向」の項目値が全体より低く、
 実現度が低い傾向にあるというデータが観測できました。

緊急座談会:達成感を高めるために出来ること。

ボクたちの前向きトーク

「将来、達成感こそが生きる糧となる…」

法学部の自由な気風を評価する声の一方で、もっと厳しくしてほしいという声やグループディスカッションで力が発揮できるように鍛えてほしいという意見もありました。ゼミ、海外留学、サークルなどを通して身につけたことや成長したこと、大学への希望について、4人の法学部在校生が教授とともに語り合いました。



法学部4年
西澤 ひとみ

法学部2年
間瀬 純

法学部4年
石井 聡

法学部3年
田沼 絢子

法学部 教授
岩崎 正洋

自由、は難しい。

岩崎教授 前号のジャーナルでもキーワードとしてあがっていたように、日本大学法学部はよくも悪くも自由であると。自由であるがゆえに、自分で考えてやりたいことを実現できたという一方で、自由に流されてしまって、結果的に何もない4年間を送ってしまったという声も多くあった。まず、この自由というキーワードから話を広げていこう。みなさんは自由についてどう思っているか、さあ自由にどうぞ(笑)。

石井さん 僕は大学1年のときは正直、自由すぎて何をしたらいいのか分からなくなってしまい、自堕落な生活をしてしまった。それは自由の悪い面だったと思います。2年生になって、もう一度自分を見つめ直して、自分の特性ってなんだろうと探して、ゼミに入ってからやっと自分が本当にやりたいことが見つかった。サークルに入っていないので、僕にとってはゼミの存在が大きかったです。

間瀬さん 法学部にはクラスがないので、個々に責任がのしかかってくるんですけど、その責任を投げだしてしまうと、自由の悪い面がでてしまって、ひたすら遊びたい方向に走ったり、や

りたいこと……やるべきことではなくて、やりたいことに流されてしまう。自由、難しい言葉だし、いい面、悪い面の両面があると思います。

田沼さん 私は大学に入ってから、いつも新しい自分になりたい、どうすればベストな生き方ができるんだろうって思ってきました。そのためにドイツへ留学したりして、日本大学はそういうチャンスがある場所だと思います。だから、私にとっては自由というのは、いい面だけです。

岩崎教授 じゃあ、現状に満足しているということ？

田沼さん いや、満足はしてないです！ まだまだ知識もぜんぜん足りないですし…上手く言えないけど。

西澤さん 私は自由といわれたとき、まず、何をするのも自分次第という言葉が最初に浮かびました。入学したときに、日本大学法学部の学生とはいうものの、どこにも所属していない、団体にいるわけじゃない、という感覚がおそってきて、すごく不安になって。どこかに所属したい！ と思って、サークルに入ったのが1年生の夏でした。みんなで合宿の企画をして、実施して、遊ぶという体験をして、ああ大学生活をやっているんだという感動や満足感がそこにありました。そこで思ったのが、合宿で満足感を感じてから、そのあと、もっと面白いことをやりたいなあってどん欲になっていったんです。もっともっと、いいものがやりたいと思うようになって、もの足りなさが残るといっか。

大学生活にとって居場所とは

岩崎教授 いま一通りみなさんの話を聞いて、基本的に自分の居場所があるかないか、というのが非常に大きいのではないかと感じました。大学という砂漠のようなただ広いところに、ほお~んと放りだされて、あるいは大海原と考えてもいい。はい、そこで自由ですよと、何をしてもいいですよと言われて、前向きに泳ぐトレーニングなんかをする学生もいるだろうけ

れども、どうしていいかわからないという人が大方だろう。

間瀬さん 居場所がなく、ぼつんとしている1年生は大勢いると思います。**岩崎教授** そうだね。「あなたたちは自由ですよ、何をしてもいいですよ。自由を謳歌しなさい」という感覚は、みなさんの2倍も3倍も生きている大学の先生なり職員なりが、かつて自由を経験したから、自由だったときに時間を有効に使えばよかった、とか勉強すればよかったとか感じているから言えることであって…。現実には、居場所があつて初めて、そこでコミュニケーションなりが生まれて、自由を謳歌できるようになるということでしょうね。じゃあ、みなさんに聞きたい。大学における居場所って何？

石井さん 僕にとってはそれがゼミだったわけですが、入学した当初から、大学内にどういった居場所があるのかを、説明してくれる場所があるとうれしいのかな…と。

岩崎教授 それは自分で探すものじゃないかな。

石井さん そう、そうなんですけど、高校までは君はこういう特性があるから、こういう場所が君に合っているから、というふうにガイドしてくれる。大学は先生がおっしゃったように、ポンという感じで、自分のことを見つめ直せる場所ですとか、探す機会ですとか…。

岩崎教授 機会、なんだろうね、場所というより。自分のことを見つめるチャンスを意識的にもつことが必要だと思う。そうすると、ある程度の強制力が必要ということ？ 調査でもっと厳しく、道を作ってくれた方がいいという回答はあった。

石井さん どこまで強制するか、というのは難しいですし、あまり強制すると自由ではなくなってしまいます。ちょっと都合がいいかもしれないですけど、選択肢だけいっぱい用意してもらえたら(笑)。

間瀬さん 居場所ということで、ひとつキャンパスの環境もあると思います。僕以外の先輩方は大宮校舎で1年生を送られた。1年生だけのキャンパスってことになるわけですよね。新入生にはやさしい感じになるんじゃないですか？ 僕は新入生のときから三崎町の校舎だったので。

西澤さん そうかもしれない。隣にいる子が必ず1年生だから。2年になってこっちに来たら、話しかけた隣の人が実は4年生だったというのが、確かにあった。

間瀬さん ガイダンスのときに、同じ授業をとっている隣の人に話しかけよう、友だちになればいい、というお話を聞いたんですけど、全員が1年生とわかっていれば安心して話しかけやすいですけど、周りが2年生、3年生、4年生かもしれないという状態で、ぼつんと座っている学生は多いんじゃないですかね。

岩崎教授 そのまま4年間過ごしちゃう人もいるだろうし、ぼつんと感をバネにして、よしと、起死回生をねらってゼミに応募するというものもあるわけでしょう？ その環境のなかで開花する人もいます。

間瀬さん そこも自由ですよ、言ってみれば。座ったままでいいのか、自分からアクティブに行動するのか。

岩崎教授 基本的にはアクティブに自分から行動すべきだ、ってことだけど、それを言っちゃあおしまいだから(笑)。



田沼さん あの、ゼミとかサークルとかはもちろん居場所なんですけど、たとえば学祭でもサークル主体だけじゃなくて、法学部の一学生として参加できるような企画があればいいと思います。

石井さん 僕もサークルに入っていなかったので疎外感があった。サークルやゼミに所属していない人が行って、よかったなあと思えるような学祭のイベントって、何があるんだろう？

西澤さん 学祭のイベントというわけではないんですけど、夏休みなんかに参加できる、ちょっとした小さなイベントがたくさんあるといいかなと思います。たとえば、春にあるヨーロッパ研修は行きたくても高くてちょっと…という人もいると思うので、もっと小さな…国会議事堂をめぐるツアーとか。

岩崎教授 日帰りできちゃうね(笑)。

西澤さん 先生、笑いますけど、国会議事堂って関東の子たちは小学校の社会見学なんかで行っているんですけど、地方の子は行ってない子も多いです。

岩崎教授 そうか…。たとえ小学校のときに行ったことがあったとしても、小学生の目線と、専門分野を学ぶ大学生の目線とは違うわけだから。法学部に関わるすべての場所、たとえば最高裁判所とかテレビ局とか新聞社とか、5つの学科すべてにからむような現場をツアーでまわるというのは、なるほど面白いアイデアかもしれないね。現場を肌で知る、見る。こんなに便利なロケーションにある大学だからこそ可能。

石井さん 現場ツアーというのは僕もいいと思います。たとえば、自分は法律学科なんだけどメディアに興味があるな、とか、公務員になりたいと思っていただけ証券取引所を見学してみたら興味がわいてきた、という風に変わっていくかもしれないです。将来を考えるうえでも選択肢がひろがるのはうれしいです。

岩崎教授 何パーセントの人が参加するかわからないけれど、たとえ少数だったとしても、そこでコミュニケーションが生まれる。「大学生だから自分で関心をもったら、能動的に動け！」っていうのは昔の発想？ 能動的に動けるように、大学側が機会をもうけることは必要かもしれない。

能動的でなければ何も始まらない。

田沼さん 少人数のイベントってことで、ドイツの語学研修の話をしていいですか？

岩崎教授 もちろん、どうぞ！ それはまさに、双方向のコミュニケーションやディスカッションの機会だったわけですよ。そういう視点から話してください。

田沼さん 全員で7人で参加したんですけど、最初は何だろう、この人…朝から晩まで同じところで顔を合わせて生活するの、ムリでしょ…みたいな人がいて正直イヤだったんですけど(笑)。でも語学力がなくて日本人以外と話せない状況のなかで、何か行動しないと何も始まらないし、何しに来たかわからないし、と思って。そこで一歩踏み出す原動力となったのは、やっぱりいっしょにドイツに行った日本人の学生だったんです。彼らに助けられたこともあったし、1か月そこで密なコミュニケーションをとりながら、7人で乗りこえてドイツの研修を終えられたというのは、すごく充実した体験でした。実際は泣きたいこともあって、毎日たいへんだったんですけど(笑)。

岩崎教授 まさに達成感ですね。共通の体験であり、それもまた大学生活におけるひとつの居場所でもあるわけだ。となると、やっぱり能動的にやらなくちゃということになってくるけれど、しかし、やらない自由というものもあると思います。

西澤さん いま聞いていて思ったんですけど、達成感というのは、自分がやろうと思ってやったことじゃないと感じられないものなんじゃないかって。

岩崎教授 強制されてやったときに、達成感をはたして生まれるのか。

田沼さん 満足はするかもしれないけど…。

西澤さん 達成感はないと思う。

間瀬さん ない。

石井さん ない。

ディスカッションと講義はどちらも必要

岩崎教授 調査のなかでもニーズの高かった双方向の授業について聞こう。

石井さん 議論する場がある授業の方が、満足感とか達成感がありました。毎回レポートを書いてきて、それについて議論するという授業だったんですけど、実際に話してみ

「あっ、自分はこういう意見だったんだ」というのも明確になりますし、反対に違う意見をもっている人がいることもわかる。ただ座って授業を聞いて、というより達成感がありました。

間瀬さん 僕もディスカッションの講義には賛成ですが、そのときに難しいのは、大学というのは専門教育の場なので、知識を習得することも必要だということだと思います。学生同士がディスカッションすると、言ってみればシロウト同士の議論なので、事前に予習をしたとしても、インターネットで簡単に調べたりする程度で、浅い知識になりがちですし、偏った方向へ流れていってしまうこともあって。

岩崎教授 専門知識をしっかりと学ぶ講義形式とディスカッションと、両方が必要ということでしょう。あまりにも現状では双方向的な授業が少なすぎるという事実はあるでしょうね。

石井さん ゼミに入らなかった人は、一回もそういうディスカッションの授業を受けずに卒業しちゃう人もいますので。4単位くらい双方向の授業を必修にしてもいいのかなと思います。

岩崎教授 ゼミというのは教員と学生の双方向もあるし、学生同士の双方向というものもある。ゼミを必修にすると大学は変わってくるかもしれないですね。そうなる第一希望には必ずしも入れないかもしれないが、難関ゼミに入ってそこで達成感を味わう可能性もでてくるよね。現在ゼミは3年スタートだけど、これについて意見があれば？

間瀬さん 僕は個人的には1年生の秋から選考して、2年生から始めるというのがいいんじゃないかと思えますね。

岩崎教授 他大学では、2年、3年とゼミを本格的にやって、4年生は卒論だけというところもあることにはある。

田沼さん 私は2年から、もちろん卒業までゼミをやりたい。大学にせっかく入ったんだから、4年生という1年もムダにはしたくないっていうか。人そ



れぞれ何が大切かは違うと思うんですけど、私は4年生まで何かを得たと思うので、卒論だけじゃなくってみっちりやりたいです。

西澤さん 私もみんなとまったく同意見。現状では3年生でグループワークやって、学祭のフォーラムで発表する場が1回しかなくて、次はもう卒論に向けて、となっちゃうのでも足りない気がする。2年生から始めて2年間トレーニング期間があって、それから卒論というのがいいかなと思います。

岩崎教授 みなさんの若いエネルギーを、われわれはもっと酷使させた方がいいみたいですね。そのためには、こちらの教員側にもエネルギーが必要だということで、相手はしよせん大学生だという目線で接するのはなく、ひとりの人間と人間だと思って接することが必要でしょう。最後に、これまでの話を踏まえて、達成感や実現度を高めるために、大学に期待することは何か、自分はどんなチャレンジをしようと思うのかを聞かせてください。

間瀬さん 僕が思う達成感とは、まず明確な目標があって、そこに向かおうと努力して、それが成し遂げられたときに得られるもの。だから満足感とは違うもの。満足感というのは、別に目標も何もなくても、ただ日々暮らしているだけでも得られる可能性があるけれど、達成感はその可能性がない。それが、学生生活ではゼミでのフォーラムとかになると思うんですけど、自分ひとりじゃなくて、周りの人との相互作用があって、さらに高めら

れるものだと思います。ただその達成感、チームワークだけじゃなくって個人単位でも得ようと思えば得られるもので、それが日本大学法学部だったら、資格に対しては課外講座が用意してあるとか。どのような部分で達成感を得られるかは人それぞれだと思いますが、最終的には個人個人がどれだけ能動的に動いたかによって変わってくるんじゃないでしょうか。

田沼さん 間瀬くんが全部言っちゃったんで(笑)かぶるんですけど、達成感とは違うもので、簡単に手に入るものじゃない。貴重な感覚。いつもいつも感じていたら、それはやっぱり達成感とは違う。目標に近づけるように自分が変わっていくことが重要なことなのかなと思います。

西澤さん 私にとって達成感というのは、目標に達するまでのプロセス、自分がどれだけ取り組めたかっていう、そのプロセスが一番のポイントです。目標を達成できたとき、自分の中に何かが残る。たとえば知識が増えたとか、グループワークだったらみんなとより分かり合えるようになったとか、仲間とのつながりができたとか。内面的なものであれ外面的なものであれ、自分の中に何か残ったときに、私は、ああやり遂げたな、達成感があるなと感じます。

石井さん もう全部言われてしまったので、ひとつだけ(笑)。僕にとっての達成感、自分の新しい一面を見つけたときです。

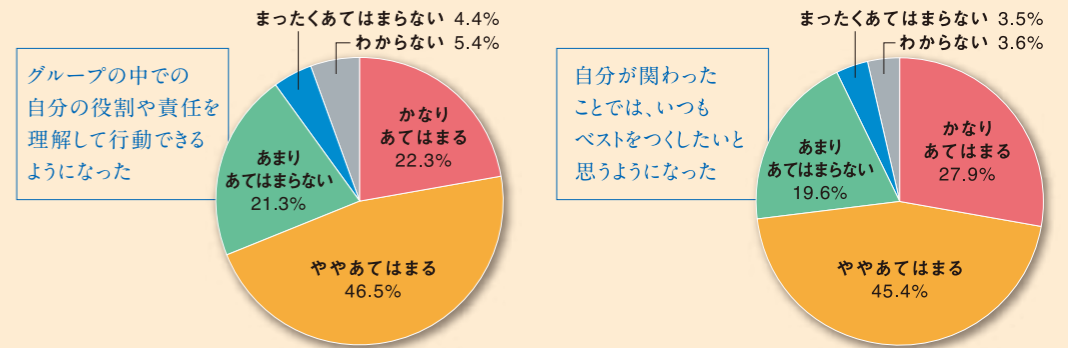
夢をもとうじゃないか。

岩崎教授 最後に、全体を聞いて私が思ったことを。これは大学の、というより私個人の考えになるでしょうけど、話します。満足感から達成感へ、という今回のテーマを追っていくと、夢。夢をかなえる、夢をもとうじゃないか、夢を追い求めようということなんじゃないか。いまここにいる若い在校生たちに対してだけでなく、卒業生、私の年齢の教職員、さらにもっと年上の人たちであっても、人間というのは生きていく限り夢がなければ達成感を得られないし、夢っていうのは達成しないというか、ひとつの夢が実現したらまた次の夢が膨らんでいく。夢を実現するために努力できるし、夢をかなえようとするその心意気というものが重要なんだと思います。だから夢を追い求める人は美しいし、生き生きしている。もうここで一巡することはしないけれど(笑)、あなたは夢をもっていますか？ あなたは大学に入学したころの夢を覚えていますか？ その夢をかなえる努力をしていますか、してきましたか？ すべての学生にそう問いたいと思います。同時に、私自身も夢を追い求めて、まだまだ人生半分ぐらい。これからも追い求めていきたい、ということで締めくくりたいと思います。今日はみなさん、率直な意見をありがとう。

取材日／2011年2月 法学部図書館に於いて

学生満足度調査より「大学生活で身についたこと」の項目の中から

座談会の発言にもあるように、グループ活動や共通体験を通して役割や責任を果たせるようになったという達成感や、いつもベストをつくしたいという思いは、ともに70%前後の人が実感しています。これを所属別で見ると、ゼミやサークルに所属している人の方が、無所属の人より高い傾向にあることもわかりました。



学生と教員と職員に聞きました。

10人10色の 「マイ・チャレンジ」

あなたは夢をもちますか？

その夢を追い求め叶えるために、どんなアクションをおこなっていますか？

何かに夢中になることで、誰かのために一所懸命になることで、

手にすることのできるモノが達成感だったりします。

たとえ小さな達成の積み重ねだとしても、やがてその先にある夢へとつながる。

学生だって、教員だって、職員だって、日本大学法学部には

チャレンジしている素敵な人がたくさんいます。

未来の豊かな自分を信じて、あなたも一歩を踏みだしましょう。

職員
Voice

職員だって、チャレンジする！「自分色のサポーター」
異業種交流で世界をひろげる

裏方の仕事がしたい！ そう思って選んだ大学職員。
あっ、またちょっと言葉が足りなかったかな……
学生に不快な思いをさせちゃったかも。
そんな反省や悩みを打ち明け、相談できる職場の先輩や
異業種で働く先輩たちとの交流を大切にしている。
学生という主役を輝かせる裏方になりたい。

法学部 教務課 久保 樹里

学生
Voice

僕の、私のチャレンジ！「前向きに行動する学生時代」
いつも何かしら目標をもつ

講義やゼミやサークルや、それは当然がんばるけど
埋もれがちで、ふだんの時間を充実させたい。
計算してみたら4年間の約半分はそんな時間。
僕が目標にしたのは、1年間でとれる資格をとること。
3年生で宅建をとり4年生でFPをとった。
期間をくぎって目標に向かう、そのプロセスが楽しい。
法学部4年 橋本 元彦

学生
Voice

僕の、私のチャレンジ！「前向きに行動する学生時代」
なければ創っちゃえ！

和気あいあいと、純粋にフットサルを楽しめる。
女子だって、物静かな性格の子だってみんなで楽しめる。
そんな同じ気持ちを持った
新入生10数人で創ったフットサルサークル。
準公認をめざし一体となって運営できるまでに成長した。
ここは自分にとっての居場所。
法学部2年 佐久間 星和

教員
Voice

先生だってチャレンジ！「学生時代の情熱をいまも」
とにかく人間関係が財産

ニューヨークで弁護士資格をとったものの
就職に困っているときに、
手を貸してくれたアメリカ在住のOBの方。
サークルのアメフト仲間とは一生の交友関係を。
大学で得た人間関係は後の人生で自分に返ってくる。
ぼんやりと、でいいから目標をもち
その分野の先生に会いに行こう。
そこから交流が生まれる。
法学部 准教授 坂本 力也

学生
Voice

僕の、私のチャレンジ！「前向きに行動する学生時代」
1年間の海外交換留学へ

入学してから、とにかく英語をがんばった。
スピーキング、リーディング、ひたすら単語を覚える授業。
専門の比較憲法ゼミでも英語の文献を読み
ストックホルム大学への交換留学生に選考されるまでに。
多彩なカリキュラムと、面倒見のいい先生たち
「アウトプット」の意識があれば、環境は整ってるよ。
法学部3年 小林 知夏

学生
Voice

僕の、私のチャレンジ！「前向きに行動する学生時代」
あえて苦手にチャレンジ

運動ができないことがコンプレックスだった。
大学に入ったら、体も心も強くなりたい。
そう思って探した場所がキックボクシングのサークル。
試合も経験した。70kgから61kgへの苦しい減量にも耐えた。
苦手なことに向き合うことで
チャレンジを続ける精神が培われた。
法学部4年 堀内 悠一郎

学生
Voice



01

僕の、私のチャレンジ!「前向きに行動する学生時代」

ともに読み創作する楽しさ

活字はひとりで楽しめるもの……
僕も最初はそう思っていたけれど、文芸サークルで仲間とともに読み書く楽しさを知った。目を見て批評し合える人間関係の下地があるからちがう視線を知り、客観的にもなれる。これから学業が本番、文芸はずっと趣味として。
法学部2年 中野 将志

教員
Voice



08

先生だってチャレンジ!「学生時代の情熱をいまでも」

韓国留学生の橋渡しを

人とのつながりを大事にする韓国人が好き。日本大学韓国留学生会の顧問として留学生と卒業生、留学生と日本人との橋渡しをしたい。専門の万葉集研究でも年に3回は韓国に足を運び私自身も韓国との縁(えにし)を感じる。韓国人と友だちになりたい人は、ぜひ私まで!
法学部 准教授 野口 恵子

学生
Voice



09

僕の、私のチャレンジ!「前向きに行動する学生時代」

将来なりたい自分のために

文系だけど好きな数字と触れたくて法学部の課外講座で簿記検定の2級をとった。2年生の夏休みには秘書検定2級を。いまずぐ何かの役に立てるっていうより将来の自分のため、世界をひろげていきたいから。日本社会をよくするために関われる仕事に就きたいから。
法学部2年 中村 圭奈絵

職員
Voice



10

職員だって、チャレンジする!「自分色のサポーター」

プレッシャーの中で学んだ

インカレで連覇を続けている日大自転車部。27連覇をかけた4年生のときはキャプテンとしてプレッシャーの中で目標を達成することを学んだ。卒業後は競輪選手へ……というレールをあえて自分で敷きかえて、大学職員の道へ。大学にいい影響を与えられる一人になりたい。
法学部 学生課 我妻 敏

インタビューを終えて…

トライ アンド エラー、そして考えるから面白い。

自由な空気が流れているのが日本大学法学部ですが、これは誰もが認める大学の特色のひとつです。当然のようにその中には「何もしない自由」もあるわけです。自分の一生において若く心身ともに活性化している今こそ無限とまでは言いませんが、いろいろなことを吸収できる年代なのです。先生たちも、職員も、ほら同級生だって、始める人は始めています。

取材日/2011年2月

卒業生メッセージ

いろいろな立場の人の身になることを学んだことが、いまの仕事に生きています。

武蔵野市役所の障害者福祉課で、ケースワーカーとして知的・身体障害のある方の生活サポートを担当しています。電話や窓口では、相談というより話を聞いてほしい、とおっしゃる方もいらっしゃいます。もともと人に頼られるのは好きで、充実感を感じる方ですが、立場の異なる人の身になることを学んだのは、やはり法学部での学生生活でした。ゼミ、サークル、アルバイトと休みなく活動した4年間でしたが、中でもアメフトのサークル活動をやり通した自信は、今にも生きています。選手としては上手

い方じゃなくて(笑)、試合中に怒られることも多く、そこでは忍耐力が身につきましたし、2年生から事務方を任されたことで、人の身になることを学びました。たとえば、最初は下の人に仕事を手伝わってもらうのが苦手で、全部自分で抱え込んでいたのですが、下の人にも仕事を与えてもらう喜びがあることや、仕事を他人に任せるとも必要であることなど。3年生のときに、常勝でリーグ負けなしという強豪チームに勝った試合では、うれし泣き。あのときの達成感はいまも忘れません。



管理行政学科(現公共政策学科) 2010年卒業
武蔵野市役所 障害者福祉課 細田 主磨

優越感と劣等感をいったりきたりした学生時代ひとつの“合格”をきっかけに前向きに。

会社では人事・労務を担当しています。社員のみなさんは年上の方がほとんどですが、小さなことでも、何か困ったときには「そうだ、あの人の聞いてみよう」と頼りにしてもらえる存在になりたいと、勉強を重ねています。上司から「会社と社員の距離を縮めてくれたね」という評価を頂けたことはとても嬉しかったです。こんな私も学生時代は自信がなく、常に他人と自分を比べてばかり。3年生で行政書士の試験に落ち、4年生でもう一度受けるのが怖くて。母に背中を押されて再チャレンジし、合格でき

たことがきっかけになり、それからですね。「人と比較することなんてないんだ」と思えるようになり、常に前へ進んでいけるようになりました。現在、日本大学法学部校友会の幹事のひとりとして、学生を支援する活動をしています。卒業後も母校と関わりを持ち、後輩のために尽くせるなんて、これほど嬉しいことはありません。校友会のサポートによるマスコミセミナーや就職相談、資格取得後の褒賞制度などいろいろありますから、在学中から校友会を知って親しんでいただきたいですね。



法律学科 2008年卒業
株式会社 セントラルコーポレーション勤務 庄司 芳香